

# きこえと ことばに 障害を もつ 子どもへの 接し方

大 塚 明 敏

## は じ め に

このレポートは昭和 61 年 8 月 1 日に本県の輪島で開催された石川県聴覚・言語障害児親の会の研修会において著者自身が講演した要旨について補筆したものです。流れに即して紹介してまいりますと大凡次のようになるでありましょう。実際に会場を見渡した上での状況判断に基づく対応の仕方であります。

お見かけしたところ、「きこえの障害」をもつ子どもさんをお持ちのご両親が多くいらっしゃるので、話の重みは、そちらへかかるかも知れませんが、その点は予め、ご容赦をお願いいたしておきます。しかも、本題へ入る前に、私自身が以下のような経歴と実践とを踏まえた実際家の立場から皆さんにざっくばらんにアドバイスをするのだということをもあえて申し上げておきます。私の略歴をお話しておけば、どのような立場の人間か大体の見当もつかうかと思います。

1 熊本県立聾学校教員としての経験 3 年 6 か月、この道に足を踏み入れた年次は昭和 23 年、当時の聾学校には聾、難聴の子どもはもとよりとして、聴啞の子ども（重複障害児、精神遅滞児、失語症児、自閉児、言語発達遅滞児等）など種々な子どもが入っておりました。また聾学校では吃音児の治療や、構音障害児の治療などもやっておりました。2 東京教育大学、および筑波大学附属聾学校の教員としての経験、30 年、その間、同校幼稚部主事としての経験 6 年、3 東京教育大学、および筑波大学講師（聴覚障害児言語指導法を担当）歴任すること 17 年、4 NHKテレビろう学校、および障害幼児とともにの講師 14 年、5 母子愛育会母子保健講習会講師（言語治療を担当）14 年、6 金沢大学教育学部聾学校教員養成課程（通称聾研究室）の助教授、および教授としての経験が 3 年です。学生が聾学校で教育実習をするような際には、現場の先生方と一緒に、実際に授業の指導などもやっています。

著書も沢山ありますが、主な著書のみを挙げても次のようなものがあります。1、NHKテレビろう学校一耳の不自由な乳幼児の育て方―（日本放送出版協会発行）2、ことばの障害をなおす―早期発見・早期訓練の手引―（保健同人社発行）3、日本語発音練習チャート（10 巻）（湘南出版社発行）など、ご利用くださった方もあろうかと思います。

これからお話しすることは、決して無責任な大言壮語を弄しようとするものではありません。私の極めてきた真実を皆さんにただただお伝えするだけのこと、そして、皆さんの子どもさん方が中央の子どもたちに負けじ劣らずによりよく成長されることを心から乞い願うのみであります。

もし、疑義があるお方は、どのような立場のお方であれ、〒727 千葉県市川市国府台 2-2-1 にある筑波大学附属聾学校の幼稚部、ないしは、小学部における子どもたちの伸び具合を一度ご覧くださることをおすすめいたします。「聴覚障害児のノーマライゼーション（正

常化)とは何か。」「健常の小学生と同レベルの学習ができるようになるとはどのようなことか。」「ことばのなかった子どもが本が読めるようになるとはどのようなことか。」「ことばのなかった子にことばを発達させるとはどのようなことか。」「きびしい残存聴力しかないのに、その耳をよく使えるようにするとはどういうことなのか。」「ご理解がゆくにちがいないと思います。障害をもつ子どもさんのご両親は、決して井の中のかわずであってはいけません。更に進んでいる世界や方法を知って欲しいのです。何故ならば、そのような情報が子どもさんを一段と伸ばす「きっかけ」や「はずみ」となるからです。

これから、いよいよもって具体的な本題へと入ることにいたします。まずは「きこえやことばに障害をもつ子どもさんを育てる」とは、一体どのようなことなのかということについて触れておきます。

それは、皆さんの直接的な毎日の願いである「ただ、ことばさえ覚えればよい。」「口さえきいてくれたら言うことなし。」「発音さえはっきりしておればよい。」「意思疎通さえどうにかできればよい。」というような程度の次元の低い問題ではないのです。すなわち、「ひとりの人間としてできるだけ正常な子どもに育てていこう。」とか、「地域の健常の子どもたちと共に遊び共に学び、そうして、やがて成人し、社会へ出たら、健常の仲間と共に働くことができ、喜びも悲しみも分かち合え、共に暮らしていける人間に育てたい。」ということでもあります。これを難しいことばでは「ノーマライゼーション（正常化）」などと呼んでおります。簡単に言えば、「普通の子ども」「普通の人間」に育てたいということでもあります。非常にうがった見方をしますと、皆さん方ご両親の究極の「願い」や「祈り」というものは、そういうところにあるわけです。むしろ、そういう気持ちこそご両親としての自然の情、真の心というものではないでしょうか。

この気持ちや精神を子どもさんを育てられる場合の基本的方向として一貫して持ち続けることが実は大切なことなのです。「初めに祈りありき」ただし、単なる空念仏では幾度お百度まいりをやろうと、子どもさんの上には何事も生じてはまいりません。重要なことは、ご両親の「祈り」を実践や行動に移し、転化し、子どもさんの望ましい成長に必要とされることをひとつ一つ丁寧に、かつ、細かくやってあげることでもあります。神様も、仏様も、イエス様も、お不動様もお稲荷様も、はては医学ですらも皆さん最愛の子どもさんを見捨てましたが、幸いにして、生身の人間の手によって子どもさんにやってあげられることは、まだまだ何億と残っています。それが「療育」や「教育」というものであります。子どもさんのご両親であるところのここにご来場の皆さんや、聾学校、きこえの教室、ことばの教室、病院の言語治療士の先生方、こぞって火の玉になり、一致協力してやる大仕事であります。しかも見かけはささやかで、実質はその子どもさんの社会的生命にかかわる気の重い、心晴れやらぬ難事業です。

加えて、その仕事たるや24時間、年中無休の教育であります。何故ならば、「きこえやことばの障害」の場合、その多くのものが、24時間絶ゆることなき障害であるからです。その上、今日も、明日も、明後日も、1週間、半月、1月、3か月、半年、1年、2年、3年と続く障害であります。もちろん、障害には夏休みも冬休みも、土曜、日曜も、祝祭日もありません。学校や病院にいても障害はありますし、家庭にいたところで同様であります。他方、学校や病院の門を一步外へ出て街中を歩いていようともしその障害はその存在を主張し続けるわけなのです。この現実を学校や病院の先生方はもとよりとしてご両親の方でもしっかりと理解しておかれる必要があります。

学校まかせ、病院まかせでは全くどうにもなりません。学校や病院に子どもさんがいる間は

先生方が障害の穴うめをやってくれますが、一度外部へ出たら、お母さん、ないしは家庭の中のどなたかが、その仕事をおやりになる他はありません。子どもさんの日常生活の中でのご両親の子どもさんに対する援助者としての役割や、家庭教育の役割が重要視されるゆえんであります。したがって、子どもさんへのご両親の接し方の巧拙が、あるいは、それが建設的か、否定的か、受容的か、拒否的かといった姿勢が直接、間接にも大きく問われることともなってくるわけです。子どもさんを伸ばすも伸ばさないもご両親次第、親は子どもの教育の鍵であるとはよく言われることばですが、真理の一面をついていと解してよいであります。

しかしながら、こういったことは、ご両親自身の一方的な責任に帰せられることでなく、どのような先生によって手引きされたかによって、教育力のある腕の立つご両親にも育てば、そうでないご両親になり果てる場合もあり得るので、むしろ、素人であるご両親を指導する立場にある病院や学校の先生の力量もまた大いに問題としなければなりません。

幸いにして本日ここにご来場の皆さんの場合には、私の考え方を参考にされて、今後は多分、お子さんへ教育力を行使できるお母さん、あるいは、お父さんへと自己変革をしてゆかれるにちがいないと私は信じております。ただし、共鳴、共感なされない方の場合にはその限りに非ずです。

ここでは、「きこえやことばに障害をもつ子どもさん」への接し方やつきあい方のサワリの部分だけを幾つか紹介しておきたいと思います。

## 1 よい親子関係をつくりましょう。

親子関係をうまく築くこと、すなわち、子どもさんにご両親の間で互いに愛し愛される関係、子になつき、親になつかれる関係をつくることは、子育てに必要とされるすべての条件や活動の出発点です。この原理、原則は、決して特殊なものではなく、むしろ、「きこえやことばに障害」があろうと、なかろうとを問わず変わるものではありません。障害児という別種の二流の人間を育てるのではなく、同じ「ヒューマン・チャイルド（人間の子ども）」を私たちは育てていくわけです。

ここには、聴覚に障害をもったお子さんに対する一般的な親子関係の築き方から紹介を始めてまいりましょう。知能も特に遅れていなく、自閉的な行動もそれほどでない多くの子どもさんの場合には、このようなやり方で大体うまくいくようになってまいります。

### 〔一般的なやり方〕

理くつぬきで本能的にまるで猿の母子でもあるかのように子どもさんをかわいがりましょう。特に身体と身体をぶつつけること、寄せ合うこと、肌と肌とを接することで母の愛を伝えましょう。抱いたり、おぶったり、「たかいたかい」をしたり、「いない、いない、ばー」をしたり、ほほずりをしたり、ほっぺたにキスをしたり、首の下を手でさすってやったり、頭をなでてやったり、肩車をしてやったり、でんぐり返しをさせたり、お馬さんになったり、おぶって走ったりなどしてやるのです。また、この場合、子どもさんがかわいくてしょうがないといったほほえみを顔中にみながらおきます。

その他、一緒に玩具で遊んだり、かけっこをしたり、冒険ごっこをしたり、お風呂に入ったり、散歩やお使いに連れていったりするのです。家に来たお客さんの前にも他の兄弟たちと一緒に堂々と出すようにします。自分の家の子どものわけですから、また、そうするのが当然です。

以上のような接し方やつきあい方は、ひとりのお母さんだけがそうするのではなく、お父さ

んたちももちろん同じような姿勢で臨む必要があります。特にお母さんが上のお子さんや、下のお子さんの世話で手があかないような場合には、それこそお父さんの出番であり、活躍の場です。その上、それをやれば、お子さんとの間の関係が密になるというおまけまでついてまいります。お寺さんやお宮さんへ「障害をなおして下さるよう」おまいりするよりもご利益は遙かに絶大であります。障害をもったお子さんをうまく育てるためには、「能登のトトラク」はかたきと思わねばなりません。お母さんおひとりのか細い腕ではあまりにも荷が重過ぎるからです。また、お父さんにしましても、どんなに障害をもったお子さんであろうとも、わが子、ご自分のお子さんではありませんか。たとえ、それが間違っていてできてしまったお子さんであったとしても……。不幸にして男とは間違いばかりをおかす存在です。私にしてもその運命から逃れ得ぬ業を負ったひとりです。

男性論はともあれとして、これまで申し上げてきましたようなかわりをしておりますと、親の気持がよく通うようになり、子どもさんは安心して、すなわち安定した気持を常にもって、ご両親を信じ切った状態で毎日を送れるようになります。そうしますと、しつけにもよくのり、事柄のききわけもよくなり、困難な仕事であることばの学習やコミュニケーションの学習、聴覚活用の学習、発音の学習といったことなどにもよくのってくれるようになってきます。このようになれば萬々歳で、親子がそれほど苦勞をしなくても人間の成長発達にとって必要な体験は体験としてお互い日常共有してゆけるようになってくるのです。そこまでの見通しが立つようになるまでは、お母さんであれ、お父さんであれ、「苦勞」や「忍耐」、「努力」というそれなりの投資をされることは、やはり必要でありましょう。もちろん、要領のいい人あり、悪い人もありで、一概には申せませんが、大多数の方は努力という錦の御旗によってミニマム（最小限これだけは）の線まではカバーすること、成長することが可能だと言っておきます。

次に少しばかり扱い方に工夫を余計に要する自閉的な傾向を有する子どもさんに対する接し方について触れておきます。

#### [自閉的な子どもさんの場合]

必ずしもここに紹介しますすべての方法が有効だとは限りませんが、試みる値打ちのある手立てではありますのでヒントとして一応紹介しておきます。

#### (1) 子どもさんの気持を落ち着かせる工夫をします。

子どもさんが一日中でできるだけゆったりした気分で過ごせるような手立てを用意してやるわけです。具体的には次のような配慮などしてやります。順番の意味は抜きに知っておくと役立つ場合も出てまいりましょう。

○ 子どもさんが今やっていることについて自分がけがをすとか、命にかかわるとか、周囲の人に害を及ぼすとかいうようなことがない限り、それを受け入れ、やらせ、じっと見守っておきましょう。

○ ご両親の方は「何事でもござんなれ」「どこからでもどうぞ」と言わんばかりにゆったりと構えておきましょう。

○ 家庭やご両親、他の兄弟たちにとっての貴重品は、子どもさんの気がつかぬ所や手を触れられない所にしまっておきましょう。その分、子どもさんに対して注意をしたり、押さえたり必要が減ってまいります。

○ 家事もできるだけ大まかに処理し、ゆったりと落ち着いた様子をしておきましょう。

○ 何気なく子どもさんのそばにいたり、しかも、ゆったりと座っていたりしましょう。

○ 子どもさんが小さい時は、昼寝や夜寝の時など、昔のお母さんがやってくれたように添

い寝をしてあげましょう。

○ おんぶやだっこをしてやりましょう。

○ 子どもさんが何か言ってきたら、待たせないで直ちに快く応じてやりましょう。

○ 子どもさんによっては人ごみの中へは、止むを得ない時以外は連れ出さないようにしましょう。とにかく子どもさんが安心してられないような場所は警戒したほうが無難です。

(2) 子どもさんが喜びそうなことをいろいろやってあげましょう。

参考例として具体的な遊びを紹介しておきます。あとは皆さんがご自分の子どもさんの好みに合わせて工夫しながらやってみてください。

肩車、ポートぎっちらこ、おうまさん、たかいたかい、おんぶして走ったり、跳んだり、歩いたり、追いかけっこ、手をつないで走る、おみこしわっしょい、やきいもごろごろ、おしくらまんじょう、台の上からのとびおり、でんぐりかえし、腕にぶらさがらせる、両脇をかかえて振り回す、横だきにして振り回す、手と足をお父さんとお母さんがもって横に振る、足でぶらんこをしてやる、車にのせてひっぱったり、押したりする、毛布にくるんでゆらゆらゆってやる、おでこでごつつんをする。ぎゅっと抱きめる、ボールをぶつける、くすぐってやる、息の吹きかけっこ、いないいないばー、にらめっこ、かくれんぼ、ざぶとん跳び、ぶらんこ、すべり台、トランポリン、ジャンピングボードなど。

お母さんが赤ちゃんをあやしたり、喜ばせたり、幼児と楽しく遊んだり、ふざけたりする時に使うような手を自閉的な子どもさんに対しても使ってみるのです。しかも、のってくる遊び、のってこない活動、子どもさんの対応など様子をよく観察しながら、子どもさんがいやがったらすぐやめるなどして、しばらくしたら、またトライするとかして、こういった活動や遊びを媒介として親と子の心の交流の接点を探していくわけです。

何のために(1)、(2)に挙げたような作業をするのかと言いますと、このようにして親子の間に何とかして愛し、愛される関係、なつき、なつかれる関係をつくり上げていこうとするためです。

子どもさんの年齢や身体の大小にこだわらず、自閉的な症状や傾向が強い子どもさんに対しては、気長に徹底してこのようなおつきあいを続けてみたほうが問題状況を軽くすることへつながっていくようです。そうすると、やがて子どもさんの気持が安定するようになり、正常な乳児や幼児の成長発達の様式に似た経過をとり始め、大変な難事業であることばの取り込みすらも始めるようになってきます。それまでは、ことばの種まきや、水やり、肥料やりをたっぷりとやって、否ことばのことなどは、一寸よそに置いて、人間としての種まきや、水やり肥料やりをたっぷりとやって、子どもさんの人間としての「いのち」が育ってくるのを待ちに待つのです。

## 2 日常生活の中での接し方を大切にしましょう。

子どもを育てるということを考えた場合、本来的には、しつけにせよ、ことばにせよ、発音にせよ、耳を使うことにせよ、きめられた時間に訓練をして、あるいは勉強をさせて、身につけさせていくというものではありません。むしろ、朝起きたり、夜寝たり、食事をしたり、おやつを食べたり、顔や手を洗ったり、歯を磨いたり、トイレへ行ったり、お風呂に入ったり、洋服を着たり、脱いだり、散歩へ行ったり、スーパーマーケットやパン屋さんにお使いに行ったり、テレビを見たり、幼稚園や学校へ行ったり、お父さんの車洗いの手伝いをしたり、といった日常の様々な活動を通してご両親や兄弟、友だち等のかかわりの中で自然にそのようなもの

を身につけていくのです。すなわち、日常のくらしを送りながら、その家、その地域の子どものとしての物の見方、考え方、感じ方、ふるまい方、といったものを身につけながら、もっと大きく言えば人間としての生き方を身につけながら、ことばも、発音も、耳を使うことも、ひとりで身につけていくものです。

こういった原理、原則は、きこえやことばに障害がある子どもが、よくしつけられ、かつ、ことばや発音、耳を使うことなどを身につける上でも生かされなければならない重要なポイントです。それどころか、同じく大原則であると言ってよいでありましょう。「親は子どもに行動のよいお手本を示しなさい。」「親もできるだけ規則正しい生活を送りなさい。」「子どもを音のお風呂にひたしましょう。」「子どもをことばのお風呂に入れましょう。」「家庭の中に発音のよいお手本があるように心がけましょう。」「家庭に口話的雰囲気<sup>くわしき</sup>が満ちているようにしましょう。」などと警句的に言われることばの真の意味も実はこんなところにあるのです。

その意味では生活の現場におけるしつけ、ことばかけ、ことばのやりとり、あるいは、音やことばを聴かせること、子どもさんのよい声や発音を受け止め承認してやることなど、最も重視し、手厚く扱わねばならない指導法であります。「訓練」とか、「練習」などという勉強の形での指導法、机の上での勉強や訓練など、所詮は王道や正道ではなく、日常生活の中での指導をもっと確固たる成果として生かすための補助的方法に過ぎません。しつけであろうと、ことばであろうと、発音・発語であれ、耳を使う指導であれ、子どもさんを育てるための教育としての指導の主流や基盤をなすものは、あくまでも日常生活の中での指導におかなければなりません。日常生活の場を即教育の場と化していくのであります。そうしなければ、なかなか身についたものともならなければ、生きたものともなっていりません。くり返しますが、健全の子どもですらも、生きる<sup>いき</sup>術としての日常の文化は、生活という24時間教育によって身につけていくものです。ましてや「きこえとことば」に障害を有する子どもさんにおいておやというべきでありましょう。

お母さん方は、机の上の勉強は、机の上の勉強に過ぎないこと、そういう種類の勉強は、人間のほんの一部の学習に過ぎないことをしっかりと知るべきです。生活の中でのしつけや、ことばかけ、ことばのやりとり、音の聴かせ方ということが上手なお母さん、子どもさんに多様な経験をさせることができるお母さん、子どもさんと楽しく遊べるお母さんに皆さんどうか育てて欲しいと思います。こんなやり方こそが、最も強味のある長続きのする効果的な指導法であり、同時に子どもさんにとっても無理のない自然な指導法であります。このような指導法を称して「ナチュラル・アプローチ」と呼んだり、「母親法」あるいは、「母親主体指導法」などとも呼んだりしています。もちろん、文字通り、「生活場面法」などと呼ぶ場合もしばしばです。

簡単に言えば、一見平々凡々たる毎日の生活を子どもさんの障害に合わせて少しばかり意識的にきめ細かく、丁寧に扱っていくことであります。健全の子どもであれば、しいて声をかけなくてもいいような時でも、一声、二声、三声とことばをかけてやるとか、ことばで説明とか言いかけをしてやるとか、質問をしてやるとかしなければなりませんし、また、子どもの無言のメッセージやことばの形をなさない表現、構文的に日本語として不完全な表現、音声的にひずんだ発声、発音、発語等をもじっくりと受け止め、耳を傾けてやらなければなりません。同時に同年配の地域の子どものがするような振舞い方、物事のききわけもわからせていく必要があります。

こういう事柄はすべて生活の現場においてひとつ一つ扱うことによってのみ、その子どもさ

ん自身の身についていくものです。お母さんはもとよりとして、お父さんも、兄弟たちも、おじさんも、おばさんも、おじいさんやおばあさんも、家族全体が一丸となって、皆さんがお母さんに協力をして「きこえとことば」に障害のある子どもさんを、自分の家庭の一員として、あるいは、その地域社会の子どもとして、能登の子どもさんは能登の子どもさんらしく、金沢の子どもさんは金沢の子どもさんらしく、加賀の子どもさんは加賀の子どもさんらしく、育てて欲しいと思います。特に乳児や幼児の段階で大切にしなければならないことは、直接の経験、すなわち、見たり、聞いたり、試したり、触ったり、やったりすることや、遊びを豊かにさせることであります。もちろん、耳が不自由であることや、ことばが不自由であることについての配慮や工夫を十分にやりながらのことではありますが……。近江町の市場や、名鉄丸越、ダイエー、香林坊アトリオ、その他のスーパーや商店、交番、消防署、寺院、神社、山や川、海、駅、空港など、すべて教材の宝庫であります。その他、地方色豊かな諸行事への参加、見学等も実に内容のあるよき経験であります。子どもさんへのことばかけ、子どもさんとのことばのやりとり、はたまた自然なしつけをするための絶好のチャンスというものです。

### 3 ことばも発音も、耳を使うことも、その指導は、きかせることから始めましょう。

つまり、こういった内容の学習を子どもさんに手引きするには、「インプット・ファースト(入力先行学習)で臨んだ方がいいですよ。」ということになります。わかりやすく言いますと、「取り出す前に注ぎ込め。」ということなのです。「ことばがわかる。」「ことばが自発的に使える。」「きれいな発音ができる。」「耳が使える。」というご利益、すなわち、利子が欲しければ、「ことばをきかせる。」「ことばに触れさせる。」という「ことばの貯金」をこれでもか、これでもかと、沢山やっておくべきだという考え方です。皆さん方の場合、果たしてそれだけのご努力をやっておられますでしょうか。多分違うのではないかと推察をするものです。それでありながら「早くことばを言って欲しい。」とか、「きれいに発音して欲しい。」なんぞ、大体、虫が良過ぎる願いだと思います。インプットされていないもの、つまり、入っていないものは待てど暮らせど出てくるはずはないのであります。ましてやそれが元々「おまけ」や「利子」の性質のものとなれば、なおさらのことです。

貯金を例に出しますが、私のように1万や2万のはした金を郵便局へ持って行って貯金したところで、利子など無きに等しいものです。しかしながら、電力会社の円高差益を1億円も貯金すれば、かなりの利子がついてまいります。ことばが自ら使えるということも、これと全く同じでして、ある程度理解できることばが、子どもさんの頭の中に沢山蓄積されることなしには、全く起こり得ないことであります。たとえその評価をあまくしたとしても、実用になる自発語としては出てこないであります。子どもさんに自発語がないということは、理解できる手持ちのことばがないか、非常に乏しいかのいずれかと見て確かであります。発音・発語の問題にしましても、徹底的に耳から話しことばに適した声や、発音のお手本、すなわち、音声・音韻の情報とか、話しことばの情報を密度高く入れてやらねば、よい声、よい発音、よい発語など期待できないと言ってよいであります。耳が使えるようにする仕事にしても、前に述べたことと原理は全く同じで、音や音声やことばをきかせて、きかせぬくことをやらずしては、耳が使えるようになるなどという奇跡など、起こり得るはずがありません。

殊に「聾」と呼ばれるような残存聴力のきびしい子どもさんに対して、1歳ぐらいから文字中心の手がかりでことばを指導していったらどうかるでしょうか。主としてインプット(入力)されたものが文字ことばである以上、やがて出てくるものも、所詮は文字でしかないわけです。子ど

もさんは恣意的に、あるいは時に目的的に音声表現を用いしますが、日本語の話しことばのパターン（形式）をもった発音や発語ではなく、単なる原始的発声活動のレベルを越えるものではありません。更にはどうかすると読話にのらないことは無論として、耳の方もいよいよもって使えないようになってしまいます。それならまだしも、せっかく音や音声が届いたとしても、子どもさんに音を無視する習慣をさえつけてしまうおそれがあります。何故にそのようなことが起こるかと言えば、文字のみの提示に気が奪われて、音や音声による刺激を欠き、たとえ、子どもさんが耳を使う潜在能力を有していたとしても、それが顕在的な使える能力として芽を吹いてこないというわけです。結果的にはこの方法でやる限り、ことばを取り入れる手がかりは文字ということになり、文字による実用的な表現は時間的に数年というずれをおいてしか出現してこないし、そうかと言って表現手段を与えぬわけにはいかず、その方法として手話をも導入せざる得ないということになるのかも知れません。実際このような実態を有するケースを石川県へまいて幾つも眺めてきております。

取り扱ったケースに即して感想を述べますと、文字なんぞ教えなくてもすむ1歳という時代から何故に文字を教え、手話なんぞわざわざ教えなくても事足りる幼児の段階から何故に手話を教えるのか、至極、奇妙、不可思議の感を抱いております。どうして最初から私たち共通の母国語である話しことばによってことばの発達を助けたり、コミュニケーションの発達を助けたりできないのでありましょうか。大いに疑問とするところであります。ことばの習得の方法も、習得の時期も、ことばを使った子ども自身の活動も、できるだけ正常な子どもの発達の道筋に合わせたり、近づけたりすることこそ本来の方向であります。幼児の段階からしてことばを自由に駆使できる子どもさんに育てたいのであれば、0、1、2歳の時期から文字などではなく生のことばを着実、かつ、豊かに理解する能力を先ず育てておくことが肝要です。幾らかなりとも明瞭な発声・発音・発語の能力を育てる上からも、耳を使う能力を育てる上からもプリンス（原理）は全く同様だと言ってよいでありましょう。実は子どもさんの頭に最初に何をインプット（入力）するかということが後になって非常に重要な意味をもつのであります。

#### 4 子どもさんの気持をことばの指導の出発点としましょう。

大人のことばを一方的に教え込むのでなく、子どもさんの気持を尊重しながら、あるいは、ノン・バーバルな表出を手がかりとして、その気持を読みとりながら、コミュニケーションのいと口を求め、そこにことばを合わせ、子どもさん自身のことばが育つように心がけるべきだという考え方です。ことばがまだ無い段階の子どもさんの時は、周囲の状況から、あるいは、子どもさんの表情、身振、動作、呼び声といったものから、何が言いたいのかを読みとるよう努力しようではありませんか。また、ことばをかけてやる時にも、子どもさんを取り巻く周囲の状況とか、実物、絵、話す人の表情、音声などを手がかりに意味が伝わりやすくなるようにして、話しかけてやるようにしましょう。聖書にあるような「初めにことばありき。」の考え方は捨ててしまって、むしろ、「初めに心ありき。」の精神で子どもさんとかかわり合っていくことの方が実態に合っております。子どもさんの気持の動きや流れを見ながら、子どもさんの気持をゆきぶりながら、子どもさんとやりとりをし、ことばをかけ、更には、ことばでやりとりをしていくようにしようではありませんか。

子どもさんが自分で話せるようになったら、下手でも、まずくとも、まずは、じつくりと子どもさんの話を笑顔をもってきいてやりましょう。ことばの順序や文をなおしたり、発音をなおしたりするのは、その後でいいわけです。絵の話であれ、生活経験の発表であれ、とにかく



最後の最後までブロークンの日本語で結構ですから、子どもさん自身が話そうとするような意欲を育てることが大切です。このような扱いを取り入れませんと、いつまでもご両親か先生に教えられたことばのままで、魂の発露としての子どもさん自身の生きたことば、躍動することばとしてなかなか育ってきませんので事は重大です。健常の子どもたちですらも、決して最初から正しい文とか、整った文章、正しい発音できちっと話せるわけではありません。この事実を私たちもよく理解しておく必要があると思います。

## 5 子どもさんに「わかるまで」「身につくまで」指導しましょう。

ここでは特に「きこえの障害」をもつ子どもさんの場合を中心にお話しますが、その子どもさんがどうもうまく伸びてくれないという時には、次のようなことが原因となっている場合がよくあります。

その一つの原因は、始めから子どもさんの能力を「耳が不自由なんだから駄目なんだ。」と決めてしまっておきながら、「どうして家の子はこんなにできが悪いのだろう。」「私は小学校の時、優等生だったのだから、お父さんあなたのせいよ。」いわば「遺伝だからどうしようもない。」「畑は地味が肥えているのだが、種が悪かった。」とばかりにあきらめてしまっているところにあります。

こういった現象は、何もご両親方のみならず、聾学校の先生方の場合ですら、しばしばよくやらかすミステイクであります。では、何故にそのような事情がわかるのかと申しますと、研究会などに招かれて、とび入り授業やら指導授業をやらされたような場合、日頃はその学校先生方から「できない子」「難しい子」「口話にのらない子」などとレッテルを貼られている子どもたちでも先入観抜きに徹底して予定された時間をも度外視して、あの手、この手を使ってみると、授業にのるようになってくる子やことばがわかるようになってくる子が実際に出てくるからであります。その子どもさんが本当にどのような子どもさんであるかということは、学校場面であれ、家庭場面であれ、あるいは、遊びの場面であれ、ご両親や先生方が子どもさんの持つ未知なる可能性をもっと信じて徹底的にかかわってみることなしには、教えてみるることなしには、刺激してみるることなしには、本当の意味ではつかみ得ないであろうと思います。一寸見たところ無理かと思われたところで、もっと子どもさんを引っぱってみたり、押してみたり、時間をかけて教えてみたりすることが非常に大切であります。

もう一つの原因は、ご両親であれ、先生方であれ、わからせたつもり、教えたつもり、指導というものが、余りにも多過ぎるということであり、学年が上がるにつれて、この現象は益々ひどくなるとすら言ってよいであります。しかも多くの場合、「知らぬが仏」とは真に困ったことと言う他はありません。わからせたつもりと、本当に子どもさんがわかったということとは、全然違うことであります。また、教えたつもりと、本当に教えたこととは、結果において全く次元の異なる問題であります。 $1+1=2$ になりますが、 $0$ は $0+0+0+0\cdots$ と無限に集めたところで未来永劫にわたり零であります。したがって、わからせたつもりや教えたつもり、指導なんぞであれば、何時間、何日、何週間、何か月、何年と幾ら四苦八苦しながらやったとしても無駄な努力、時間の浪費という他はありません。もっと厳密な見方をすれば、ご家庭の場合であれば、家計の浪費であり、学校や病院などの場合には、膨大な国家予算、すなわち、国民の税金の浪費であります。しかしながら金の浪費だけならば、まだ罪は浅い方です。問題は、そのような扱い方をしておりますと、子どもさんに、「学習というものはいい加減にやっておいても許されるものだ。」「わかろうが、わかるまいがおかまいなしでいいものだ。」

「お母さんや先生にウンウンウンとか、ワカッタ、ワカッタという顔つきや格好をしておけば、相手は安心し、満足するものだ。」という悪い習性、すなわち、アダプティブモディフィケーション（聴覚障害者の特異理解と称される現象で、誤解、曲解、まやかし、あやかしの理解の類である）を不知不識のうちに付けてしまうという恐れがあるからです。

「きこえの障害」の子どもたちは、ことばの学習の場合であれ、教科の学習の場合であれ、先生やお母さんから、「わかりましたね。」とたずねられると、どの子どもさんも「うん。」となぜいたり、「わかりました。」と、さも理解したかのごとく、口では答えるのですが、「わかりましたか。」ときかれたそのことだけがわかっていて、その実、肝心かなめの学習した内容や、本当にきかれた内容については、全くの白紙答案で何にもわかってはいないということがしばしばであります。先生やお母さんの方で念のため、たずねてみると答えられない、書かせてみると書けない。どうするのか、どういうことか、行動化させてみるとやれない、それは教科書のどこに書いてあるのかを求めても指示できない、といったようなことでボロを露見し、子どもさんたちの真実の理解の姿が見えてくるわけです。このような事実に関しては「家の子は小学校へ行っているのだから大丈夫だ。」「難聴学級へ通っているのだから心配ない。」などとは一概には言いきれませんので要心するにしかずであります。具体的には、子どもさんに、わかったかどうか、伝わったかどうか、どの程度わかったのか、伝わっているのか、教えたことが身についたかどうか、どの程度身についたのかなどを確かめながら、教えていけばいいわけです。とは言いながら健常の子に対する場合よりは、きめ細かく内容理解や学習態度づくり等についても評価をしていくことが肝要であります。家庭でできます学習に対する検討、確認、評価の方法を幾つか紹介しておきますので、活用してくださればと思います。

○ 子どもさんが、きいているかどうか、見ているかどうか、読んでいるかどうか、考えているかどうかをつかみながら、ことばをかけたり、説明をしたり、質問をしたり、解答を求めたり、指示をしたりしましょう。

○ 「いつ、だれが、なにを、どこで、どうした、どんな、どうして、なぜ、いくつ、どう思う、見たこと、行ったこと、したことがあるか、そのことについて知っているか」など、いろいろな角度より発問して、それに適確に応答できるかどうかをつかみましょう。

○ 「教科書のどこに書いてあるか。」「それというのはどこを指すのか、また何を指し、何を意味するのか。」きいてみましょう。

○ ことばの意味についての理解を確認するためや実用的なコミュニケーションの能力、態度を評価するために指示や命令をくだして子どもさんに動作化をやらせてみましょう。

○ 説明したことや話したこと、その時間に学習したことなどをその場でもう一度子どもさんなりの考えや、ことばで話させてみましょう。

○ 必要な内容について「では書いてごらん」と命じて紙に書かせてみましょう。

## お わ り に

世の中には、他の人の力を借りるにしても、やはり、できることと、できないことがあります。「きこえやことば」に障害をもつ子どもさんの教育にしましても、病院や学校の先生にお願いしたとしても、ご同様にそこでもできることと、できないことがあります。将来はご両親の期待に満足にこたえられるような状況へ持っていきたいところですが、今の現実現実であります。そのような現実の中にあつたとしても、皆さんの子どもさんがマキシマム・グロース（最大限の成長）をするように知恵をしぼる必要があります。どうしたらよいのかと言いますと、

ご両親自らがもっと勉強をして、直接ご自分の子どもさんに手をくだすご努力を今より以上になさって、子どもさんを伸ばしていかれることであります。これならば、やる気になってやれば、どの人にだってできるわけです。病院まかせや学校まかせのご両親が多過ぎます。どの道、自分の子の運命や人生について最終的に責任を負える人間は、病院や先生なんぞではなく、ご両親をおいて、他に誰もおるわけではありません。子どもさんがご期待の通り伸びない時、病院の先生をうらもうと、学校の先生をうらもうと、できないことはできないことであります。石川県のもつ今の社会資源の状況の中でもっと何とかしよう、もっと増しな育て方をしよう、と願うのであれば、そのご両親なりにいろいろ工夫や努力をされるより他に道はないであります。この度の講演会や研修会のような試みもその一助でありましょうし、また本年（昭和61年）3月より金沢大学教育学部の教室を会場に始めている「石川県難聴幼児親の会」による1か月に1回予定の勉強会もまた、そのような趣旨のものであります。

とにかく、同じ「きこえとことば」に障害をもつ子どもでありながら、東京、大阪、京都といった大都会の子どもやその道の実験学校である筑波大学附属（聾学校）の子どもは伸びて、石川県や北陸の子どもたちは伸びられないという悲しき現実、これから何としても変えてゆかねばなりません。何故ならば、経済大国（？）と称する同じ日本に住む子どもたちではありませんか。大都市や筑波大学附属の子どもたちが適切な手立てによって伸びるものであるならば、石川県や北陸の子どもたちもまた、そのようにして等しく伸ばす必要があります。それが人間すべて平等を主張するデモクラシーの国、「日本」に生まれた障害をもつ子どもたちの人権ではないのでしょうか。石川に生まれたから、北陸に生まれたからといって一人の子どもさんが障害をもちながら人間としてよき方向に成長していくことに、不利益となるようなことが許されてよいものでしょうか。そんなことは許されないと思います。

元々「きこえやことば」が不自由な子どもたちであれ、なかんずく、聴覚障害児の場合には、日本の子どもである以上、手話や文字などに頼らなくても相手の話を直接理解できるようになる能力や権利を持っています。もちろん、日本の子どもの母国語である日本語を習得する能力や権利も持っています。口で自由に話せるようになる能力や権利も持っています。本が認めるようになる能力や権利、読み書きが自由にできるようになる能力や権利、勉強ができるようになる能力や権利も持っています。障害児のための特殊教育のみならず、一般普通教育（小学校、中学校、高等学校の教育）を受ける能力や権利も持っています。大学へ進学できるほどに成長し得る能力や権利も持っています。もちろん、聴覚障害児、あるいは聴覚障害者個人の好みに応じた選択として手話を身につける能力や権利をも有しています。その上、職業人として開かれた産業分野へ進出する能力や権利も持っています。住んでいる地域社会において市民としての責任を果たす能力や権利も持っています。

しかし、そういった諸条件が満足に機能するためには、人間としての基礎づくりが、人生の早期より、着実に、かつ、合理的、累積的に乳児期、幼児期、児童期、青年期を縦に通してなされていく必要があります。それには、ご家庭の責任もさることながら、私のような立場の人間をも含めた大学、病院、聾学校、難聴学級、ことばの教室といったところの臨床家、すなわち、先生たちの責任も、これまた甚々重しと言わざるを得ません。石川県や北陸一円に住む「きこえやことば」に障害をもつ子どもさんたちへ、より一層の幸福が到来することを心より祈っております。

#### 参 考 文 献

大塚明敏：聴覚障害児のことばの指導—その成果を高めるための方略—金沢大学教育学部紀要 教育科学編 第34号 昭60

大塚明敏：耳を使うことの教育的解釈—ヒヤリング・インターベンション—教科教育研究 第21号 金沢大学教育学部 昭60